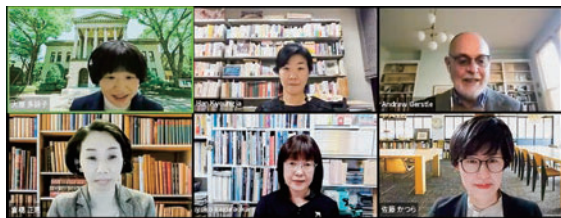


青山学院大学日本文学会主催国際シンポジウム 「歌舞伎の東西―絵と文化―」を開催

文学部日本文学科教授 大屋多詠子

3月19日、Zoomにて国際シンポジウム「歌舞伎の東西―絵と文化―」を開催しました。アンドリュー・ガーストル先生（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院名誉教授）をお招きし、倉橋正恵先生（立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員）、神楽岡幼子先生（愛媛大学法文学部教授）、大屋の四名が発表しました。

江戸時代の歌舞伎には、台帳（脚本）などの幕内資料（劇場関係者の資料）や、芝居番付（チラシ）などの劇場側が作成した印刷物、その他、役者絵をはじめ



めとした歌舞伎周辺のさまざまな出版物が遺されています。映像のない江戸時代においては当然ながら、これらの資料や印刷物を通してのみ、当時の舞台の評判や役者の人気を伺い知ることができません。これらはそれ自体が美しい印刷物でもあります。本シンポジウムは、上方と江戸の芝居と相互交流、歌舞伎・文学との交流の様相を、絵を通して考えようという試みでした。

ガーストル先生のご講演「摺物に見る上方芸能人の活動」では、上方の歌舞伎役者、浄瑠璃太夫、三味線弾きの襲名や追善に際し、俳諧などに絵を加えた、筆致も画題も風雅な摺物（一枚摺の版画。多くは多色摺）の貴重な資料を多数ご紹介下さいました。歌舞伎や浄瑠璃は「俗」の文化ですが、その担い手の襲名などの節目の記念には、浮世絵とは違った、和漢の古典的な「雅」な画題の摺物が作られていたこと、その慣習が昭和まで続いていたことをお示し下さい

ました。

倉橋先生のご講演「役者と鼠唄」では、江戸を中心に「俗」ながら、たくさん色鮮やかで華やかな浮世絵を通して、有形無形に役者を支える鼠唄の活動をご紹介下さいました。現在の俳優やアイドルをファンが応援する心情や、贈り物をしたり、「団扇絵」で応援するなどの行動が今も昔も変わらないことをお示し下さいました。

前半のお二人は歌舞伎をとりまく人々の文化活動についてのお話でしたが、後半は文学との関わりからの発表でした。神楽岡先生は「黄表紙と役者絵」と題して、黄表紙（江戸時代の大人向けの漫画。風刺性が特徴）『其返報怪談』（恋川春町画作）に描かれる役者絵についてご紹介下さいました。本作は化物と狐の騒動を扱った、化物が役者の「団扇絵」を使って、役者に化け、狐をやりこめるという内容です。描きこまれた役者絵が今なお現存し、いつの誰を描いたものか特定できることをお示し下さいました。当時の読者はどの役者絵か理解して楽しんでであろうこと、それだけ歌舞伎も役者絵も人々に親しまれていたことがよく分かります。

最後に大屋が「馬琴作品の歌舞伎



馬琴による歌舞伎化作品「褒詞」の「笠つくし」The British Museum (CCBY-NC-SA 4.0)

化と上方・江戸」について発表しました。江戸後期を代表する作曲家馬琴が本格的に執筆を始めた四〇代頃、江戸で刊行された馬琴の作品が次々と上方で歌舞伎化されました。馬琴や山東京伝といった、江戸の作家が歌舞伎化を歓迎し、上方の劇場関係者に、「褒詞」という摺物や「団扇絵」を配っていたことを紹介した他、続編やその後の執筆活動からは、作家が歌舞伎化作品に受けた影響が読み取れることを示しました。

コメンテーターは本学の佐藤かつら先生（文学部比較芸術学科教授）、韓京子先生（文学部日本文学科教授）でした。「団扇絵」や「雅俗」の問題、江戸の作品の上方での歌舞伎化などの問題について討議しました。紙面が尽きましたが、このシンポジウムの詳細は画像資料を多数掲載しての書籍化を予定しています。ぜひご期待下さい。